

古墳周辺文化の研究展望

阿 部 義 平 (国立歴史民俗博物館)

1. はじめに

古墳文化の形成と拡大。その周辺文化。律令時代への発展

2. 古墳文化とその広がり

倭人・倭国とその外側

3. 南方での周辺文化

隼人・肥人・南島人の問題

4. 北方での周辺文化

在地文化の転換。土師器を伴う文化。北方系の文化。いわゆる終末期古墳。

蝦夷・俘囚の問題。北部日本における文化交流

ただ今、御紹介いただきました阿部でございます。

今日話しをいたしますのは、「古墳周辺文化の研究展望」というような題にさせていただきました。お手元に今回の報告会資料をお持ちだろうと存じます。その最後のページに、秋田県の旧石器時代から始まりまして、江戸時代や現代に至るまでの時代わけがしてありまして、それにそれぞれ著名な遺跡がはめこんで日本の歴史、秋田県の歴史という表が作られているわけです。それで、大湯の環状列石とか、秋田城とかというような遺跡もあがっておるわけですが、その中の左側の西暦300年と書いたのがあります。奈良時代の前の時代ですが、西暦300年、あるいは3世紀の後半から古墳時代というような説明になっています。ところがこの表にあるように、片側にもう一つ、時代の名前があるのです。弥生時代から通じまして、続縄文時代という一つの時代を設定して、この点に非常に大きな秋田の特色、東北部のいくつかの県の特色があります。弥生時代という時代については、ご存知のように日本に米作りが始まった時代で、米を作ることに伴って、色々な社会的な変革、土器の形が変わったりする。弥生時代という一つの時代が、この東北地方の一番北のはじめの青森県の方にまで及んでおりまして、水田も作っておったということが最近わかってきているので、教科書どおり、本州につき

ましては、縄文時代の次が弥生時代だったとわかるわけです。けれども、弥生時代というと一つの時代で一つの文化だと考えられるのですけれども、大きな要素として2つほどあるんじゃないかと思います。一つは今申し上げた米を作るというようなこと、その場所に定着して米を作るというようなことを生活に組み込みました時代です。要するに農村ができた時代というようなことで、これは青森県までのびておりますし、それから更に、北海道までその影響があって、お米以外のものを北の方まで持っていったり、鉄器を使ったりしておりますので、前の時代とは違うということで続縄文といっています。

ところが、弥生時代という時代にもう一つの大きな要素がありまして、九州あたりから、例えば佐賀の吉野ヶ里という遺跡に見られるように、一つ一つの村みたいなものが集まりまして、国家ができる。小さな国家がいくつもいくつもできるという時代です。それは、単なる農村だけということではなくて、農村の中に王様がでてくるわけですから、そういう人達は青銅器であるとか、王様のシンボルになるような宝物をつくる、あるいはそれを外国から手に入れるというようなことで、一つの政治社会、農業が始まった時代というよりも次の国づくりの時代に入り込んでおる。そういう時代は、同じ弥生時代といっても西の九州あたりから出発して、だんだん東に延びてくるんですが、どこまで延びたかと言いますと、東北地方に入らない。だいたい、関東地方の半ばくらい、鬼怒川がありますがそこらへんまでは村々が統合されまして、一つの都市といいますか、王様が住んだりするような大きな村のまわりに堀をめぐらしたり、あるいは青銅器というようなお祭りの道具を持つ。ところが、それより北の方の地帯は、米作りはやっているが、国造りをするような政治情勢は進んでおらなかった。ですから弥生時代はそういう小さな国ができる時代という、やや限定された意味と、米作りをするという2つの意味がありまして、それは一緒ではないんだということをちょっと覚えておいていただきたいと思うわけです。

弥生時代から古墳時代というもう一つの時代に移ってくるわけですが、これはどういう時代かと言いますと、ある時に、突然といっていいくらの勢いで、前方後円墳、後ろの方が丸くて前の方が四角い鍵穴タイプと呼んでいるような形の日本独特の古墳、お墓ができてくる。そのお墓は、地面の上に非常に高く土盛りをして、土盛りの頂点の上の方から、墓穴を掘り込み、そこに亡くなった人とそれからその人に伴う宝物を埋める。古墳時代というのは、どのぐらいの地域にどのぐらい続いたかと申しますと、日本列島の全部をおおったわけではなく、だいたい宮城県・山形県の南部・新潟県の半ばぐらいまでです。岩手県に角塚が一つだけ、北の方へとんである。それから、南の方はどうなっているかと言いますと、九州の北九州とか熊本県あたりには、非常に大きな古墳がありますが、南のはずれに、志布志湾という鹿児島県の非常にきれいな湾のところに、唐仁大塚という古墳がありまして、これは長さが120m位ある非常

に立派な前方後円墳です。これが、だいたい南のはじですので、南北1,000kmをこえるような範囲に、そのキー・ホール型の形を持ったような古墳が広がっていった。その時代も3世紀後半あたりからだいたい6世紀いっぱいまで、7世紀になりますともう前方後円墳という形の古墳は作られなくなると言われている。だいたい3世紀後半から、6世紀いっぱい、7世紀の初めぐらいまでが、古墳時代というふうによぶ時代であると考えていいと思います。その古墳が日本全国にただあるということじゃなくて、それぞれの地域ごとにお墓が作られるわけですが、そのお墓に非常に大小があります。例えば、大阪に仁徳天皇陵であるとか、400mをこすような前方後円墳がございます。それ以外に、岡山県ですと300mをこすようなもの、それから関東地方は200mをこすような古墳があるというような形で、大きな古墳を営む場所とそんな大きなものを営まない場所がありますので、このキー・ホール型の古墳を営むというような全国的なシステムの中では、中心地と周辺部分がある。中心地はどこかといいますと、今の関西地方です。それから各地方にも同じ形の前方後円墳がちらばっておるということです。仙台の南の名取というところでは、168mほどの長さの雷神山という前方後円墳があります。私も埴輪を拾いに行ったりしたことがあるんですけども、そこらへんが大きな古墳の北辺です。前方後円墳というと、大王と呼ばれたような人が葬られたお墓だけかということ、そうじゃありませんで、古墳というのは、一つのシステムとしてピラミッド型の構成と構造をもっているわけです。どういうふうな構造かと言いますと、前方後円墳は大きさで非常に大きいものから小さいものまで、たくさんのランクがあります。ですから、中国に使いをやりまして倭王と呼ばれるような人達のお墓、300m、400mを越すような古墳から、せいぜい前方後円墳でも30mとかの非常に小さな村落レベル位でつくったんじゃないかというふうなものまである。それから、後ろが丸いのだけでなく、四角いものもあるんですね。これは別系統で前方部をもつというふうなものが大小いろいろな地域にあります。それから、円墳、方墳というものがありまして、その当時の亡くなった人がどんな人であるかということを示すためにそれ以外の形を取れないようなそういう約束事があったようであります。例えば今、全国でおそらく3,000をこす前方後円墳があるだろう、というふうに言われています。それから、古墳全体でいきますと、10万とか、そういうふうな大変な数を先ほどいいました3世紀から6世紀いっぱいぐらいの間に作ってしまう独特のシステムがあったということのみていただければと思います。

それから、注目していただきたいのは、同じこの前方後円墳の形の書いてあるところの下に箱式石棺墓、それから、木棺墓、土壙墓というふうなものがあります。この時代に普通の一般の人たちは、お墓が無かったかということ、そうではありません。そういう人達は、土盛りを持たないような、それより古い弥生時代以来の箱式石棺墓、それから、木棺墓と申しますのは穴を掘りまして、その中に木棺を入れるんですけども、掘りますと木棺の板の痕跡が出るので

すが、頭と足の部分の板だけをよく土の中に打ち込みますので、そこだけ板の痕跡が少し深くなって出たりするというようなものです。お棺の痕跡のない土壇墓というのは、これはほとんど遺物が出てこない。ですから一般庶民はそういう意味では、古墳、高塚を作ったりするシステムの外に置かれる。古墳が営まれた範囲、その地域を当時何と呼んでいたかと言いますと、中国の王朝と交渉しますので、倭国というふうに全体としてよんでおったようです。それから、畿内におりました大きな古墳を作るような人は、倭国王、大王に当たる。そういうふうな古墳時代に、古墳が営まれなかった地域はどうであったかということになると思います。それがお手元の資料の編年表に少し出ているように、とらえ方として2つほどあろうかと思います。一つは、この時代は北の方の北海道を中心として、ずっと継続していた縄文時代・縄文文化と呼ぶような文化が、相当卓越しておるという考え方です。この縄文時代というような言い方は、日常使いますような焼き物に縄を転がして文様を付けるという特色が続きますので、それで、縄文時代と言っておるというふうに考えてよろしいかと思いますが、もう一方では、畿内を中心とした古墳を営むというような文化に伴って、模様のない明るい色の焼き物で、古墳時代の土師器とよばれる焼き物が使われておるわけです。古墳文化に特有の焼き物や生活道具、そういうふうなものが古墳が作られたところでピタッと終われば文化の境目として非常にわかりやすいのですが、実はそうはいかないのであります。

身近な秋田県のお話をしますと、この古墳時代というような時代区分の中に、寒川Ⅱという遺跡があります。それから、オホン清水、宮崎その他の遺跡をあげていまして、古墳時代相当の時代が秋田にもあるということが出ているんですけども、ところが、この寒川Ⅱというような遺跡の主体として見られるのは、これは北海道の系統の土器で、北海道の方は「北海道から運んできたのじゃないか」とおっしゃる方もあるくらい北海道の土器によく似た顔をしておる。北海道の土器だけでなくて少し在地の土器じゃなかろうかというようなものが混じっておるのですが、どうもお墓の作り方なんかは土壇墓というような、直接穴を掘りましたようなお墓に鉄の道具であるとか、そういうものも一緒に納められております。北海道系のお墓の形をしているわけです。それから、オホン清水と申しますのは、横手の方にあります5世紀から6世紀ごろの竪穴住居の跡です。ここからは7mをこすような大きな四角い竪穴住居が出てきて、そこから、5世紀の終わりごろから6世紀にかけての古墳が営まれた地域と同じような土器、同じような遺物を持つ村といいますか、家の跡が出てきた。そこに古墳も作られたかということでは、今のところ秋田県の中では、大きな古墳がみつかっていないのでわからないんですが、古墳がある、なしということを除きますと、西の方の古墳時代の文化そのものの家の跡がすっぱり出てくる。宮崎遺跡もこれは西目町の方ですが、同じように竪穴住居、この時代の竪穴住居とそれから北海道系の土器がごく少し混じっておる。それから、男鹿市の小谷地

遺跡ですがこれはもう少し古い時期の5世紀ごろの土師器がたくさん出ておるというようなことです。それから田久保下という横手市の遺跡につきましては、寒川Ⅱとよく似ました北海道系の文化の名残りじゃないかと思うような土壌墓から古墳時代の土器が出るんですけども、それ以外に、北海道系の習慣というか、そういうふうなものが、色濃く残っておるといふようなことです。続縄文時代というふうに考えた方が非常に明瞭なものと、それから、古墳時代文化の延長部分といいますか、それが北の方へ行っただというふうに考えるものと、2通り一応含まれておるといふようなことです。ここらへんの状況につきましては、どんどん新しい成果がでますから、今日は特に古墳が作られなかった地域の状況について、どう考えていったらいいのか、あるいはどういうふうにこれから研究が進んでいくんだろうというふうなことを少し考えてみたいわけです。宮崎県古墳であるとか、あるいは熊本県古墳であるとか、その南九州の状況につきまして少し気にして勉強してますもので、その状況が東北地方を考える上でもおもしろいと思いました。九州の風土を考えながらまず少し九州の状況についてもトレースしてみたいと思います。

九州の河口貞徳先生による南九州における弥生・古墳時代の墓という図面がありますが、ここに地下式板石積石室というのと地下式横穴というものがございます。それから、薩摩半島の一番南の方ですが、そこに、立石土壌墓というようなブロックと、3つがあると存じます。このかこみのある部分だけにお墓があるわけではなくて北側の熊本県、宮崎県というような地域あるいは大分県、そういうふうな地域には、先ほど説明したような畿内と同じような前方後円墳などのたくさんの古墳の分布がびっしりある。その古墳が一番南へ下がった地域、そういうふうな地域に倭国の古墳とはちょっと違うものがあるというようなことです。地下式板石積石室というのは、熊本県と鹿児島県の間に不知火の海があります。そういうふうな地域にありますのは、差し渡しが1 mから1 mをちょっとこえるぐらいの円形に掘りまして、下の方に板状の石を立てて、その上にずうっと屋根状に石を重ねて葺いていくというような形でお墓をつくるというように地下式板石積石室とよんでいます。その中に何人かの家族らしい人を一緒に葬ったり、それから鉄鍬とかそういうようなものが出るというような地域がありまして、だいたい天草諸島、鹿児島県の川内周辺、そういうふうな範囲にそういう墓制が広がっているわけです。この墓制は、簡単に申しますと、弥生時代に箱式石棺というのものがありましたが、弥生時代以来のそういうふうな庶民の墓であった箱式石棺から発達しまして、だんだんそういう丸い形に発達してくるんじゃないかといわれています。それがだいたい3世紀・4世紀ごろから始まりまして、6世紀ごろでもう作られなくなってしまうというふうにいわれています。非常に独特のお墓があるというふうに考えていただければいいかと思います。

それから宮崎県の方は、地下式の横穴といって、畑の他に何もないうようなフラットな台地の

ところに、突然、耕運機だとか馬がはまって落ち込むとそこがお墓だというようなことで見つかる。古墳と違いまして、事前にはほとんど所在がわからないというのがこの地下式横穴なんです。垂直に井戸みたいに掘りまして、2 m くらいの深さまで掘って今度は横の方に掘っていくわけで、その時に、きれいに家の形に掘るわけです。家の形に掘りまして、梁だとか棟だとかそういうふうなものをうきぼりにしたり、線で書いたりして、亡くなったあとの世界を作るわけで、そういう独特の墓制がだいたい宮崎県から鹿児島県の南のところにあるわけです。このお墓には、奈良時代ころまでの遺物がでますので、だいたい5世紀から8世紀ごろまで使われておったというふうにいわれております。最近では、この形はどこから伝わってきたのではなくて、もっと別な弥生時代の土壇墓とかそういうものと何かつながりがあるのではないかというふうな議論もあります。この2つの墓制を考古学の方でどういうふうにとらえているかといいますと、隼人の墓であるというふうに考えておるわけです。

この2つの墓制とそれからもう一つ、南の方の阿多という所にありますような、土壇墓の3つの墓制がそれぞれ隼人のお墓で、倭国の古墳とは違う形をとるんだというふうに了解してきたわけです。このお墓から出ます古墳時代の土器があります。古墳時代の土器といいますのは、普通は、模様も何もないのですけれども、この鹿児島県の特に先端の方の地域では、薩摩式と呼ばれるような土師器でも模様がついたり、粘土の帯のつくような形のものに発達していくということで、地域性がある。それから、日向の首長墓、宮崎県あたりの先ほど申しました前方後円墳ですね。普通の倭国の古墳がどのくらいあるかということですが、この地域は非常にたくさん古墳が営まれた地域でありまして、先ほど全国で3,000とかいいました前方後円墳が宮崎県だけで200以上あるというふうにいわれています。前方後円墳が集中する地域でありまして、それが河川ごとに小丸川、一ツ瀬川、大淀川という流域ごとにたくさんの方後円墳が営まれておるわけです。ですから、まさに前方後円墳の集中地帯というようなことで、行ってみると神話の世界であるといわれるわけですが、それが先ほどの隼人の墓の地帯と重なっておるということです。それ以外にも最近、鹿児島県の西側の方で鳥越古墳というふうな、阿久根市に非常に古い古墳があるということがわかりまして、簡単に申し上げますと、先ほど隼人のお墓というふうな申しました地下式横穴、あるいは、地下式板石積石室というようなものと、普通の方後円墳、普通の横穴、あるいは丸とか四角の古墳がここでは入れ混じっておるわけです。その重なっておる地域のあまり目立たない方の墓が隼人の墓だというふうにとらえていただければと思います。それから更に半島の先端の方には、おそらく弥生時代以来の伝統があるような土壇墓というようなものもあるということをおっしゃっていただければと思います。

ご存知のとおり南九州の古代の人達は、一番初めに熊襲という形で文献に出てまいります。

九州の南の方の人達は、一番初めに日本の歴史に、神話とか、熊襲という形で登場する。じゃ、隼人というのがいつごろから出てくるかというのだいたい応神天皇のあたりのところに、諸県君というふうな人が出ていまして、娘さんを天皇の奥さんにした。この諸県君というのが、先ほどの宮崎県の一ツ瀬川、そういう流域の一番有力な古墳群と関係するんじゃないかといわれていますので、ここらへんに考古学との接点があるんですが、隼人というのがずうっとそのあと奈良時代ごろまで文献にあがってくる。だいたい隼人というのが、大和朝廷に反抗するというようなことではなくて、都まで来ていろいろなおまつりに奉仕したり、奥さんになったり、都の人に仕えるというような形で、伝承が出てきます。それから、日本の神話の中にも海幸彦、山幸彦という形で天皇家と隼人の祖先が、関係があるんだというように組み込まれているわけです。ところが、中村明蔵さんとおっしゃる鹿児島の方の研究によると、この隼人という言い方は、神話なんかでは非常に古くから天皇家とかいろいろなところと関係があったんだというふうにいわれておるわけですが、そうじゃない。隼人ということばとか、都に行ったりしたのは、あとの天武天皇の時代なんだ。天武天皇の時代に多織の人だとか更に推古天皇の時代に掖玖人という形で南の方の人の名がそれぞれ出てきますし、そういうことからしますと、どうも隼人というのはある時期になってから、南九州の人がたをまとめて隼人といったということじゃないかという議論があるわけです。隼人という言い方はどうも奈良時代の直前ぐらいに確定して、この人達全体を隼人と呼ぶんだということになったとしますと、それ以前にはどういうふうに呼んでおったかというのと、それが肥人という問題です。肥人とは、肥後の国の肥という字ですが、この読みがヒビトでなくてクマビトであるとかコエビトであるとか、色んな呼び方が学者によってあるんですが、私はヒビトということによろしいと思います。当時の万葉集であるとか、風土記であるとか、あるいは当時の官庁の収支決算書であります正税帳（しょうぜいちょう）などというようなものに、肥人であるとか、肥君であるとか、あるいは肥人の某というふうにな名前が出てくるわけでありまして。紀元700年ごろに政府が鹿児島県にも国をつくったりするということで調査するために^{くにまぎのつかい}覓国使というようなものを派遣するというような時に、その土地の薩摩比売、久売、波豆、衣の評という当時の市町村にあたるような一つの単位ですが、その長官である衣君の縣という人とかが、それに反抗し肥人らに従えて武器を持ちまして中央から来た連中をつかまえてしまった。そんな事件が書き込まれているわけです。そうしますと我々は、南九州における人は皆隼人だと思っていたわけですが、そうではなくて、まとめて隼人というようになった前には、こういう肥人という有力な人たちがおった。それはじゃ一体どこの人かというのと、隼人という人達の言い方は先ほども出たように宮崎県の地下式横穴というような墓制と結びつくようです。それから宮崎県の方から鹿児島県の大隅の人達は、その墓制からいきますと、隼人でよろしかろう。ところが、薩摩の

地下式板石積石室の広がりといいますのは、肥後の国の肥君が間接的にも支配下においた人たちを肥人という形で呼んでおったのでないか。もちろん、これは奈良時代ころまで同じ墓制が続くというわけではありませんで、一つの文化基盤として考えてよろしいんですけども、東側は隼人で、西側の方は肥人と呼んでおったというようなことが考えられる。これだけはっきりした墓制の違いがあるものを一つの人間のブロックとして呼ぶわけではないだろうと思うわけです。九州の方で知っておいていただきたいのは、こういうふうに墓制の違いが文献で読みますような人間のグループの呼び方と結びついて、しかもその地域まで前方後円墳という倭国の古墳が一緒につくられているということです。それから、そういうふうに重なっている地域より先の方には、倭国の古墳もない土壌墓がある地域がある。

そういうふうに、日本の国の前身、倭国への取り込み方のいろいろな問題が出てくるわけです。それを東日本の方にもう1度戻って考えてみるとどうなるか、横山英介さんという方が「擦文文化」という本にかきました図があります。で、そこに、北海道と本州東北部の主要末期古墳の分布があります。先ほどまで説明したように、宮城県だとか山形県の南までの地域は古墳時代の各時代の古墳が営まれておる。古墳文化のエリアに入るわけですね。ところが、それより北の方はどうなるのかといいますと、そういうふうな古墳がほとんど営まれない地域があるということが一つです。宮城県の北半部分、山形県の大部分といいますか、そういうふうな古墳が作られている端のところには、鹿児島県なんかと同じようにお墓からみて問題がある地域がある。古墳が営まれていながら、実際には倭国の古墳の体制に組み込まれたんじゃなくて、人間グループとしては、倭人と簡単に言えないような人達が住んでいた地域が、古墳文化の中にも隠されているわけです。次に末期古墳の分布というだいたい7世紀から8世紀、あるいは9世紀にかかるような古墳のある地域の図があるわけです。北海道にも、札幌周辺に石狩平野の後藤古墳群とかの3つか4つの古墳群があります。在地の土器にこちらの方からいったかも知れない須恵器とか、そういうふうな道具類をもった丸いお墓で直径10m以下あるいは5mぐらいのお墓があるんです。それも畑でならされてしまうほどのお墓でもあったわけです。終末期古墳がたくさん営まれますのは、北上川流域、岩手県、それから秋田県、それから青森県でも最近たくさん見つかっておりますけれども、そういうふうな状況で古墳が営まれておる。こういうふうな古墳は古墳時代の十万、あるいはそれ以上も営まれた古墳がちょっと時代をずらして、奈良時代に入ること、あるいは、それよりちょっとさかのぼるころに、伝わって来たりあるいはさかんになっているのではないかなというようなとらえ方で終末期古墳を考えておりました。これは、東北地方北部に一種の古墳時代があったんだと考えておったんですけど、どうも考えてみますと現在の考古学の考え方では、前方後円墳というキー・ホール型の古墳が営まれなかった時代はどういう時代かといいますと、畿内でも推古天皇という7世紀の初めころ

の天皇がおりますが、そういう方の古墳はもう前方後円墳ではないし、一般的にもだんだんお墓を作らなくなるということですので、もう7世紀ごろは、古墳時代からはずしてみようというふうなことに考えるようなことになってきつつあると思います。そうしますと、この東北地方の北半にあるような古墳といいますのは、いつの時代のお墓かといいますと、大体8世紀を中心といたしまして7世紀ごろの古墳も相当数あるというふうに考えるようになってまいりました。そういうふうに古墳の年代をあげても、こういうふうな北海道・東北地方北部の終末期古墳と考えておったものは、古墳時代のお墓ではなくて、奈良時代中心としました要するに律令時代と併存するお墓であるにとらえた方がよろしいかと思います。そういうふうな時代には、もうシステムとしてのピラミッド形のお墓で身分をあらわすような構造はくずれてしまっておりますが、お墓の伝統としては関東地方とか群馬県あたりでも、まだ少し小さな古墳が作られたりしておりますので一種の在地的な風習が各地にあった。この東北地方の北部にはそういうふうな古墳が広く作られる特別な理由、特定のきちんとした理由がありまして、こういうふうな終末期古墳が作られたんだらうと思います。簡単にいいますと、東北地方でいっぱい古墳があるというふうにいわれたものは本格的な倭国の古墳の時代をすぎたあとの時代のもの、その次の時代のものである。当時の戦士というか侍というか、そういうふうな身分の人達だけ違った扱いをされたりするようなことでしょうか。いずれにせよ、そういうふうな在地の中で非常に有力で刀や武器をもつような人達の墓が作られるというようなことがあろうかという気がするんです。まともな古墳時代の古墳というものは、先ほども表にあがっていた北上川流域の角塚古墳というようなものが一つで、長さ40数mのちゃんとした古墳で埴輪もありますけれども、それだけがこの東北北部に営まれた前方後円墳あるいは古墳になるということになるかも知れません。といいますのも古墳時代が終わりましてからの奈良時代ごろに、東北地方には、多賀城をはじめまして、胆沢城であるとか秋田城というような城柵がつくられるわけですね。いろいろな古墳が作られた地域に城柵がもう一度ゼロから破算にしまして作られるような現象が生じるわけですし、非常に奇妙な現象が奈良時代ころにあるわけです。城柵が作られる地域として宮城県北半部分、宮城県北ですね、大崎平野、古川市とか、そういうふうなところですよ。そういうふうな地域の人たちも形の上からいいますと古墳文化にすっぽり包まれていたんですけれども、奈良時代に城ができるだけでなく、その地域に住んでいた人たちは身分的に別な扱いをされておる。その人たちは、東北地方北半の人達と同じように蝦夷であるとか、俘囚と呼ばれるような人達と同じような扱いを受けている部分がございます、どうも九州での在地のお墓と、前方後円墳とかが重なっている地域、隼人と呼ばれるような人たち、あるいは、肥人と呼ばれるような人たちの地域と同じような扱いをしなきゃならない部分が現象としてみられます。先ほど見たように東北地方北部の土盛りをしました古墳は7世紀・8世紀を中心と

したものだとしますと、先ほどのこの編年表に出た、3世紀・4世紀・5世紀・6世紀という時代は、東北部ではどうなっておったかというようなもう一つの日本史上で非常に大きな問題にぶちあたるわけです。それを考える上で現在、問題になっておりますのが、後北式土器の使用遺跡分布であります。後北式とはどんなものかといいますと、ちょうど深鉢形とそれに片口がついたりするような割に単純な器形の組み合わせで、壺とかがほとんどない。弥生式土器とか土師器とかには、ちゃんと組み合わせで、米を入れたりする壺とか高杯とかの組み合わせがあるんですけど、そういうものが落ちてしまって、煮炊きの甕だけあるような北海道の方の文化伝統で説明されるものです。その土器がある特定の時期になりますと、津軽海峡をわたって本州にずうっと南下してきます。その南下していた地点は、下北半島からはじまりまして盛岡周辺、それから能代周辺にもありますが、鹿角のあたり、八戸のあたりなどの集中地点があります。それから、もう一つ注意していただきたいのは、こういう東北の北の方だけでなく仙台の周辺にも集まりがみられまして、現在、東北地方での分布地点は100ヶ所以上あるんじゃないかといわれています。後北式の最後の時期の後北C-2、あるいはDというふうに研究者が呼びます時期に、だいたい弥生時代の一番最後、後期の後半ぐらいあたりから古墳時代への移行期、ちょうど移りかわりの時期に北海道で形成された土器の顔を持つものがずっと海を渡ってこちらの方まで来る。北海道の方の顔をしておりまして、こちらに来てからその土器作りを知っている人が来て作りますと同じ顔の土器ができるわけですから、北海道からわざわざ負ってきたかということについては、これから証明せねばいかなのですが、いずれにせよそういう顔付きをしたものがある時期に非常にたくさん地点として南下してくる。東北地方の北半の地域は、こういう北海道系の土器だけですっぽりおおわれてしまうのか、というような問題があるわけですが、どうも東北地方の北部についてはそう簡単には北海道系の土器にすっかり入れかわってしまったという言い方もできないようです。菊地徹夫さんの「東北北部」『古墳時代の研究』には、能代の寒川の第5号土壌墓をあげてありますけれども、そういう土壌墓の中に北海道からわざわざ持ってきたような土器と在地の土器が少し混じっておる。すんなり北海道の文化がきて入れかわってしまって北海道と同じように文化階梯で後北式から次の時代の北大式と呼びますが、北海道と同じような段階を踏んでいくかといいますと、どうも東北地方はそうはいきませんで、入ってきた時からそういうふうな在地の土器を仕入れておるといようなこととか、それから、お墓が見つかって6つとか7つとかという数でおそらく非常に小人数、一つの家族、あるいは何組かの夫婦、何代かの夫婦程度の人たちが短期間来まして、その人たちがいる期間に亡くなった人のお墓を作って残った人たちは、どこかへまた移動してしまうというようなことだろうと思います。遺跡としては縄文時代みたいに何百、何十というふうなお墓が集まるということがなく零細なお墓であるということですね。人数もそんな

に多くなかろうがどうもそこに鉄の製品だとかそういうものを結構持っていて在地の人達と交渉したような土器も持っているというようなことがあるわけです。

もう一つ、最近、非常におもしろい現象がわかったのですが、まず多賀城という東北経営の大拠点になるような場所があります。それから70kmほど北の方に奈良時代の後半に伊治公咎麻呂という人が反乱をおこしましたら、東北地方が大動乱時代に入ったというような有名な場所があるんですけれども、今の築館町に伊治城という奈良時代の後半に在地の人を頼りにして作ったお城がございます。こういう場所は奈良時代の後半になってから朝廷がようやくそこに城柵を作れるようなそういう場所なんです、その場所を掘りましたら、遡る時期の古墳時代の初めころの土器が出てきたわけです。古墳時代には大きな古墳を作るといいましたけれども、墓ばかり作っているはずはないんで、墓を作るための本拠地ですね、その墓を作るような当時の支配者の日常生活をしました本拠地があるはずであります、その本拠地が最近日本各地で見つかってきて、それを豪族居館と呼んでおります。古墳時代というのは、古墳を作るのは結果でありまして、畿内を中心としました政治関係を結んで日常生活で何とかの君とか何とかの別と呼ばれたような人たちが、それぞれの地域を治めるといようなシステムがあったわけでした、その人たちが日常住んでいたところは、小さなお城であった。古墳時代というのは弥生時代と違ひまして政治システムがきちんとする。それだけじゃなくて、攻めたり攻められたりする場合の軍事的な拠点というようなものが、非常にはっきりしまして居館という一種の軍事施設が作られておる。伊治城跡で見つかりましたのは日本で一番小さな居館でございます。周りに堀を掘りまして、その内側に払田柵と同じような柵木列をまわしまして、柵木列を生けこむための巾狭い溝が一部みつかっています。その柵木列の内りで15m×20mぐらいのですね、家一軒建つか建たないか位の範囲を囲んでしまって、どうもその中に掘立柱の建物があるんじゃないかと思うのですが、古墳時代の古い時期の土器がいっぱい出るということ、村の跡があるということだけではなくて、伊治城跡がありましたところまでは、その中に支配者といえますか、君と呼ばれるような人というか、そういうふうな中央とつながりをもって、在地の人たちを指揮するような、そういう人がすでに階層化された社会の中におった。その人の拠点として築館町の伊治城跡で古墳時代の一番古い段階の土器がゴロゴロと出てくる。ところがその中から1点だけ、先ほどいいましたバケツ型の土器が出ておる。これは、実は北大式という北海道系の土器です。4世紀代と考えてよろしいかと思えますけれども、たくさんの土師器の中に1つだけコロンと北海道の系統の土器が混じっている。これは一体何なのかというと築館町のある宮城県北というのは、こういう北海道系の土器が丘陵地とか、畑になっているところから、パラパラとみつかるといような、日本で一番南限の地帯であります。築館町よりちょっと南の方に、岩出山町という町がございますが、そこら辺からも出てまいります。みんな丘陵

地の端とかそういうところから出てくるわけです。宮城県の遺跡からは北海道系の土器だけではなくて、伊治城跡と同じような土師器の破片も一緒に出てくる。どうも量的には土師器の方が多い。木戸脇裏遺跡というのを昨年度私どもの博物館で東北大学に協力をお願いしまして、北海道系の土器の出る遺跡を発掘調査しました。掘りましたら、北海道系の土器とそれから土師器なんかが一緒に出てきました。簡単に申しますと古墳時代の南小泉式と呼ぶようなその土器を中心としまして、そこに、北大式という北海道の系統の土器も混じっておる。そこにはお墓らしい、直径1 m50cmぐらいの落ち込みがありまして、その上に黒曜石でつくりましたラウンド・スクレイパーといいますか、カワナメシの道具みたいなものが並べてありましたり、どうもお墓らしいというようなことがわかったわけです。

先ほど申しましたように、宮城県の北の方に北海道系の土器が出る遺跡が相当数あるということだったんですが、それを調査してみますと、使っている土器は、日常の土器はそれより南と同じように土師器と呼ばれるような壺だとか甕だとか、きれいな磨きのかかった土器が主体で、それに本来の出身地を表すような形で北海道系の土器が少量出てくる。それから風習としまして、お墓の上に黒曜石の道具を並べなきゃならんというようなことがあるわけです。もう一つ、それに加えて、東北地方で一番古い須恵器と呼ばれるようなものも出てきています。伊治城跡と、木戸脇裏遺跡などを調査したりした結果として何が言えるかといいますと、東北地方の北半部分で北海道の方からの文化遺物が出るような場所は、それはたまたま偶然に北の方から好き勝手なところにくるということではなくてですね、一番中心になるようなところに、南の方から北上してきたとか、あるいは、在地の農耕社会みたいなものを統合するような形で、そこに一種の政治的な権力者が生じるというようなことがありまして、その権力者の場所に北海道の人や近くの農村の人と一緒にまつりごと（政）をするため、一緒に集められるというようなこともあったと思います。南の方からの古墳文化をある程度反映するような階層文化をもつような人とコンタクトをとる、あるいはコントロールのもとで、居住地がおかれるなどの一定の政治関係をもちながら、宮城県県北の農耕には立地のやや悪いところに所在しておる。非常に零細な遺跡ですが生活道具としては、もう古墳時代と同じような土師器が中心であるというような状況らしい。しかも、非常に古い須恵器とか、中々一般の人が手に入れられないようなものでも簡単に手に入れてしまうようなそういう入り方をしておるようであります。

では、伊治城跡みたいな古墳時代の文化を体現しているような、そういう状況がどの程度、北の方に入ってたのかというようなことにつきましては、この時期のことになりますと資料がそれほどたくさんありません。横手市のオホン清水というところで、割に大きな竪穴住居が見つかっておるということを紹介したわけですが、そこから土師器とか須恵器をもった通常の古墳文化に伴うようなそういう組み合わせの農耕文化が見つかってございます。それから、岩手

県の猫谷地遺跡というようなところも見ていきたいと思います。それから、北上市の岩崎台地遺跡の簡単ご紹介をさせていただきます。オホン清水という形で竪穴住居を伴ったり、古墳そのものは見つからないけれども、古墳抜きで古墳時代文化みたいなものは、秋田県南、それから男鹿半島、あるいはそれから更に北の方まで伸びているんじゃないかと思っております。それから、岩手県側では、北上川流域あたりから含めまして地点としては多いとは言えないと思いますけれども、北上しておるというようなことは確かなようであります。この時期に先ほどの伊治城跡と同じように一種の支配者のお城といいますか、居館みたいなものがあつたのかどうか、それからその人達のお墓が土壌墓だったのか、それとも古墳みたいなものだったのか、あるいは方形周溝墓といわれるようなお墓だったのかどうか、実はそこら辺が一番知りたいところです。それがわかるとこの東北地方の古墳時代の文化あるいは終末期古墳といわれるような、武器をいっぱい持つようなそういう体制になる前といいますか、文化の核になるようなものが、一体どこにあったか、というようなことがわかるんですが、残念ながら、今一步のところでは中々わからない。仁佐瀬という遺跡からも古墳時代の中頃に北海道系と考えていいらしい土壌墓や黒曜石の石器が出ております。その遺跡でも、周りにすぐ集落があるというようなことではなくて、先ほど言いましたようにどうも零細な遺跡になるんですけれども、この古墳時代中期の段階でも、北の方の北海道とつながりを持つような墓制であるとか、それから黒曜石の石器とかいうものも使われておる。岩手県の北上市にある岩崎台地というところで、終末期古墳、先ほど言いましたように7世紀から8世紀にかけて盛んになりました古墳の一群ですね、ちょっと離れたところに営まれた一群の中古墳の堀、あるいは墓壙の中からやはり黒曜石製の石器が出てくる。ですからこの人達は高塚古墳を営んでおるけれども、北海道の系統といいますか、そういうふうな文化とのつながりをもので示しておるわけです。こういうふうな高塚古墳を持つ人達が全部、黒曜石を副葬するような人達であつたのか、それとも黒曜石を系統的に持つような、一部の人達が、その高塚古墳というふうなもののシステムの中に入ってきたのか、その辺はまだわからんわけです。いずれにせよ古墳時代という一つの時代を示す古墳は出てこない。けれども、北の方から北海道の系統と思われる文物を持ちますような遺跡がたくさん南下してきておる。ただし、これも、非常に注意してみまさんと、果たしてそこで全部入れかわってしまったのか、そうじゃなくて、ここまではだれその領域ということが固まっていなかったから、そういうふうな現象がおきたのか、その辺についてはまだまだこれから研究する必要があるだろうと思います。

ですから、現在、「お前、どう考えるんだ。」と言われますと、やはり、伊治城跡で見つかりましたような古墳時代の居館跡と言われるような権力的な施設、軍事的な施設というようなものは、もう少し北の方まで見つかる可能性があるけれども、少なくともそれは、前方後円墳と

呼ばれるような、そういうような古墳を伴うものでは、どうもなさそうだ。ですから前方後円墳みたいな畿内に集約されるようなシステムと別にですね、やはり古墳抜きで古墳文化と呼ぶべきような文化も、北の方にもう少し追っかけなければならん。北海道系の文化が、南の方へおりてきていることも確かですが、ある時間経ちますと、在地の人たちと同じようなスタイルになるということもあります。津軽海峡をはさんで長い間ずっと交流が続くということも事実です。次の奈良時代を準備する前の段階ですね、3世紀から6世紀ごろまでが実は、一番わからない。しかも、南の方の古墳から説明できる要素というのは限られておりますけれども、古墳文化の周辺というふうに考えまして、土師器とかそういうふうなものを持つ点などでは、結構北の方まで広がりがあるし、北の方から来る文化も入り混じっているという状況ですので、そこら辺をぜひ、今後解明していただければ日本考古学としては、次の奈良時代を解明する上でも、非常に大きな成果になる。それは決して能代の地域であるとか、秋田の地域とかの地域だけの問題ではなくて、日本の歴史にとりまして、大事な問題になるというふうに思うわけです。こういう状況で東北地方北部の文化というものを今まで縄文時代というようなとらえ方があったんですけれども、今後一方では古墳をつくるということからは一歩外に出た古墳文化の周辺文化といいますか、古墳文化と類似した別の文化、そういうふうな見方で見ていく余地が十分あるのではなかろうかというようなことで問題提起とそれから現状報告をさせていただきました。どうも大変長い時間を静聴頂きありがとうございました。